

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

山岳センターの講師研修会（夏山）

ここ2年間、文化祭とかち合ったため参加がままならなかった山岳総合センターの講師研修会（夏山）に2年ぶりに参加した。この研修会は、「指導者の立場として、これからの山行をより安全なものにする」というねらいのもと、長山協の指導、遭対両委員会とセンターがタイアップして行なう研修会である。今年は少人数（講師も含め13名）でかなり内容の濃いものであった。僕の班は講師の村田さん（長山協遭対委員長）の他は、僕も含めて3名。

初日（26日は）センターの人工岩場を使用し、セカンドの自己脱出からのトップの救出まで、宙づりからの脱出など岩場でのセルフレスキューの実戦訓練を行なった。その後、参加している各会参加者が持ち寄った「遭難対策マニュアル」を読み合わせ、事故時の対応について意見を交換した。マニュアルというものは固定観念を植え付けてしまうという側面もあるが、緊急時にこのようなものがあることで迅速に対応できるのは事



実である。高体連の県大会などでもプログラムに緊急時対応のフローチャートが示されるようになって数年が経過している。なくてもいいのは事故、しかし転ばぬ先の杖は、どの世界でもあって然るべき。その意味では、これまでにない企画で私としては大いに参考になった。その後、場所を移動して、ビバーク訓練を実施。写真は小生の張ったツェルトである。途中、雨が降ってくると言う一幕もあったが、逆にそ

れが訓練としてはよかった。

2日目は、七倉沢を使つての研修である。3対1システムによる要救助者の引き上げ、懸垂下降、懸垂の途中トラブルでの登り返し、ロープの張り込み、岩場における要救助者の吊り下げなどを現場の状況に応じて、繰り返し行なった。同じシステムを構築するにしても、器具を使う場合と器具を使わない場合の比較などもしながら、様々なケースを想定して中身を検証した。研修者相互の意見を取り入れながらの村田さんのアドバイスも適切で、実のある中身であった。しかし、こういったことは常にやっていると忘れてしまうもの。久々にやってみるとあやふやだった部分が、よくわかり、ためになった。

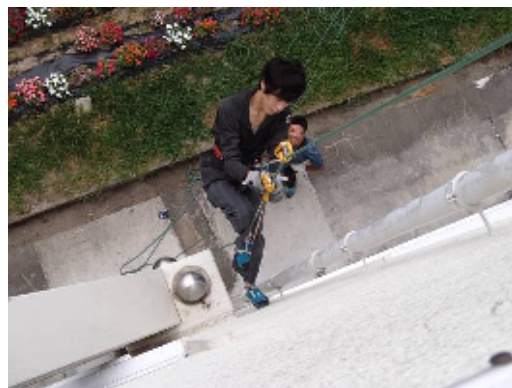


長野県内、過去最多の夏山遭難

県警によれば、この夏（7、8月）の長野県の山岳の遭難件数は117件（118人）、過去最高だったそうである。松本市内に住んでいると、北アルプスから青い機体の県警ヘリやまびこが飛んでくると、穏やかではいられない。いろいろなところで、今年は天気の良い夏山だったという話がなされる中、遭難の増加だけはうれしくないニュースである。好天ゆえに入山者が増えたことが、遭難件数をも押し上げたというのが県警の見方であるが、40才以上の中高年の遭難が103人で全体の87.3%にあたるという。山ガールブームといえど、未だ登山者の多くは40才以上の中高年が主流である。事故原因では「転倒」が51件、「転落・滑落」が39件と全体の77%を占めている。そもそも稜線など、ちょっとしたつまづきや転倒は、決して他人事ではない。僕自身もひやっとした経験は一度や二度ではない。事故一步手前と事故をわけるものは何か。

件数こそ過去最多とはいえ、長野県内の登山者数は421000人（対前年比48000人増）に登っている。となると遭難者は全登山者に対して0.03%。決して多い数とは言えないが、だからといって肯定はできない。決して慢心することなく、安全登山を続けたい。

編集子のひとりごと（池工の文化祭）



先週末池工では、文化祭が行われた。我が山岳部も展示と体験を売りに参加した。月並みではあるが、展示は3階の1教室を使ってこの1年の山岳部の活動の報告とテント生活の様子やクライミングギア、ロープの結び方の紹介、さらには昨年のヤズィックアグル峰の登頂記録写真をレイアウトし、スライドでこの夏の合宿の写真を流した。そしてメインは、今年も「3階から懸垂下降体験ができる」とし、山岳部員にはユマーリングで校舎の壁を登るデモンストレーションもさせた。

当日は次から次へと来客があり、休む間もなかった。公開期間の2日間で小学生2人を含む38名が懸垂下降を体験して、満足して帰ってくれた。（大西 記）

